

校長室より

暗唱だより

令和7年12月
第三吾孺小学校
川中子登志雄



吉田兼好(兼好法師)

この秋、運動会、音楽会、児童集会、そして記念式典と「開校150周年記念行事」が目白押しでしたね。どの行事も、とても楽しく、心に残るものにすることができました。特に6年生は、全校児童の代表として、墨田区長さんもお見えになった記念式典に参加し、大変立派に代表の大役を果たすことができました。来てくださったたくさんの方の来ひんの皆様にもおほめの言葉をたくさんいただきました。「スーパー小学生」の皆さんを、たくさんの皆さんさんに見ていただくことができてよかったです。

とてもたのしい行事ではありましたが、10月からずっとあわただしく、つかれた人も少なくないでしょう。いつもの年より、この秋は校長室暗唱チャレンジにくる人が少なかったです。令和7年の最後の月、12月は落ち着いた生活ができると思います。1年のふりかえりと、来年に向けての目標を考える時にできるといいですね。暗唱チャレンジも、ぜひ挑戦してください。

そこで、12月の暗唱課題は「枕草子（春はあけぼの…）」や「方丈記（ゆく川の流れば絶えずして…）」とならんで、日本の古典3大随筆の一つ「徒然草」の始まる部分、「つれづれなるままに」に挑戦してみましょう。

「つれづれなるままに」 吉田兼好

「兼好法師」とも呼ばれる吉田兼好は、鎌倉時代の終わりから

南北朝時代に生きていた随筆家・歌人です。そのころの日本は、地震やきん（雨が降らないことや、降りすぎて太陽が出ないことで作物が育たないこと）も多く、武士の戦が絶えないとても不安の強い時代でした。そんな時に、人里離れたところから、人々や時代の様子を、思いつくままに書き記したものが『徒然草』という作品になりました。この出だしの「つれづれなるままに」の部分は、随筆（エッセー）の文体の特徴を表していることでも有名です。随筆とは、ある題目をめぐって、したしみやすいさん文で筆のおもむくままに語るとい形式で書かれた文章のことです。

「つれづれなるままに／日くらし、硯におかひて／心にうつりゆくよしなし事を／そこはかとなく書きつくれば／あやしうこそものぐるほしけれ」
（やることもなく手もちぶさに、一日中ずりに向かって、心にうかんできえとりとめもないことを、あてもなく書いていると、（思ったより熱中して）異常なほどくるおいしい気持ちになるものだ）